

K. (1980): Geographical survey of protein variations in wild population of Japanese house mouse, *Mus musculus molossinus*. Jpn. J. Genetics, 56: 27-39

- 5) Wada, K. and Y. Ichiki (1980): Seasonal home range use by Japanese monkeys in the Snowy Shiga Heights. *Primates*, 21(4): 468-483
- 6) 好広真一, 斎藤好広, 常田英士, 和田一雄, 市来よし子, 福田喜八郎, 鈴木 晃, 山本教雄 (1980): 雑魚川および魚野川流域に生息するニホンザルの積雪期における利用地域, 個体数, 食性. 信大志賀自然研究施設業績, 18: 33-48

学 会 発 表

- 1) ヒトとチンパンジーの遺伝距離
野澤 謙・庄武孝義・川本 芳・田名部雄一
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 2) エチオピア中央高原のゲダラヒヒの遺伝的変異性と集団動態
庄 武 孝 義
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 3) カニクイザルのタンパク多型
川本 芳, 野澤 謙, Tb. M. Ischak
第25回プリマーテス研究会(1981)
- 4) ニホンザルの奇型に関する研究Ⅱ
細胞遺伝学的研究
峰澤 満・野澤 謙・和 秀雄
四手井綱英・後藤俊二・好広真一
浜田 穰
- 5) ニホンザルの奇型に関する研究Ⅰ
3年間の研究成績
和 秀雄・四手井綱英・野澤 謙
後藤俊二・峰澤 満・好広真一・
浜田 穰
- 6) 志賀A₂群の冬期における空間配置について
(予報)

和 田 一 雄

生 活 史 研 究 部 門

杉山幸丸・小山直樹
大澤秀行・田中二郎*

研 究 概 要

1) ニホンザルの個体群生態学的研究

杉山幸丸・大澤秀行

高崎山を中心とすを餌付け個体群から導き出した人口学的パラメータおよび生命表は, 断片的ながら霊仙山野生群によるデータによって修正され, ニホンザルの生命表として一応のまとめを試みた。野生個体群の生命表作製には更に詳細な資料の追加が必要であり, これまでに行ってきた一時捕獲・標識追跡に加えて, 昭和55年度はバイオテレメトリー法の導入を試みた。一方, 高崎山の餌付け個体群についても, 個体標識追跡によって, 長年月におよぶ通時的履歴の把握を行っている。

2) 狩猟採集民, 遊牧民の生態人類学的研究

田 中 二 郎

1966年以来数次にわたってアフリカの狩猟採集民, 遊牧民についての現地調査を行ってきた成果をまとめ, 農耕や牧畜の食料生産手段, およびそれがもたらす社会構造の諸問題を, 狩猟採集民社会のそれと比較しながら考察を進めている。現地調査については, 北ケニアの遊牧民研究(7月~11月), ボツナワのブッシュマン研究(12月~2月)を行い新たな資料を収集してきた。

3) カニクイザルの社会生態学的研究

小 山 直 樹

6月から11月にかけてインドネシアのスマトラ島パダン近郊に生息する2群のカニクイザルを主対象として, 個体間でみられた社会関係の把握を行った。帰国後, マカカ属に属するニホンザル, ボンネットザル, カニクイザル3種の社会関係, 社会構造の比較研究を行っている。

4) サバンナ生息哺乳類の個体群生態学的研究

大 澤 秀 行

昭和53年度の調査に引き続き, 昭和55年3月より7月まで東アフリカ・ケニア北部のシマウマ等大型・中型草原性哺乳類の社会生態・個体群生態の比較研究を現地で行った。今回はとくにバタ

*) 昭和56年4月1日をもって, 弘前大学
人文学部へ転出

スモンキーの予察を短期間ではあるが行った。

5) 西アフリカ・チンパンジーの行動・生態の研究

杉山幸丸

継続研究の困難な西アフリカ・ギニアのボッソウにおいて純野生チンパンジーの個体群を、個体識別の下に2～3年間隔で定期的に調査を続けて、道具使用などの特異的行動の観察とともに、出生・死亡・移出入を初めとする個体群動態の把握を行っている。昭和55年度は、東アフリカ・ウガンダのチンパンジーとの比較を中心に、これまでの成果を別記のようにまとめた。

総説

- 1) 杉山幸丸(1981): "野生チンパンジーの社会" 221pp. 講談社, 東京。
- 2) Tanaka, J (1980): "The San: Hunter-Gatherers of the Kalahari—a study of ecological anthropology" 200pp. Univ. Tokyo Press, Tokyo.
- 3) 小山直樹(1980): ニホンザルの人口論。朝日 稔編 "日本の野生を追って", 東海大学出版会, 東京, 8-34。

論文

- 1) 小山直樹(1981): ニホンザルの群れの空間構造と交尾戦略。"エソロジーの立場にもとづくニホンザル社会の研究"(川村編), 昭和55年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究報告書, 19-40, 京大霊長研, 犬山。

その他

- 1) 大澤秀行(1981): ハレムとなわばり—シマウマの社会を比較する。アニマ3月号 (No.96), 53-59。
- 2) 河合雅雄・大澤秀行(訳): "動物の社会行動—魚からヒトまで"(W. エトキン他著) 思索社, 東京。
- 3) Baldwin, L. A., N. Koyama and G. Teleki (1980): Field research on Japanese monkeys—a historical, geographical, and bibliographical listing. Primates, 21(2), 268-301.

生理研究部門

大島 清・目片文夫
林 基治・大内慶子¹⁾

研究概要

1) 生殖リズムの中枢機序に関する研究

大島 清

今まで特にニホンザルについて月周期, 年周期リズムにとまなう種々の正常値を測定してきた。今後, 特にニホンザル繁殖リズムの季節性に関する中枢機序を解明する目的で, 電気生理学的, 生化学的, 微細構造学的, 生理的方法によって研究を進める。

2) 胎児の生理学的内分泌学的研究

大島 清

羊水中に浮かぶ水棲動物としての胎児が外環境の刺激をどのようにとらえているか, また分娩発来に胎児が内分泌学的にどこまで関与しているかを明らかにする。

3) 初期発生に関する研究

大島 清

人工受精, 又は体外受精において, より効率よく実験用サルを繁殖させるための基礎研究を生化学的, 形態学におこなう。

4) サルの循環器系を生理学的, 薬理学的, 組織学的にしらべることによるサルの行動, 姿勢との関連を中心にした適応, 進化についての研究。

目片文夫

サルの進化, 適応に伴い骨格や脳の変化が生ずるのは当然であるが, その他の体内の諸器官もまた変化しているはずである。しかし最近までなぜか循環器系からこの問題についての探求が見落されていた。そこで電気生理学的手法を中心に, 薬理学, 組織学の研究手法を用い, 主として静脈系について各種サルを比較し, 循環器系からみた適応, 進化の機構を明らかにする。

5) 神経ペプチドの脳内代謝機構の研究

林 基治

本年度はサル脳内にP物質不活性化酵素を検索した。3頭ニホンザル脳各部位に酵素活性を調べると, はば均等に分布しており, P物質が存在しないとされている小脳にも認められた。酵素を部

1) 教務職員